

自閉症の理解（抜粋）

第4章 言語と認知

- 1 言語能力
- 2 情動の表出と理解
- 3 記憶
- 4 注意
- 5 心の理論
- 6 実行機能
- 7 要約

「自閉症の理解

原因・診断・治療に関する最新情報」

G.B.メジホフ、L.W.アダムス、L.G.クリンガー

学苑社 2000年

自閉症の理解

原因・診断・治療に関する最新情報

G. B. メジボフ

L. W. アダムズ

L. G. クリンガー

著

佃 一郎 / 監訳

岩田まな / 訳

んの10%については原因がわかった(結節性硬化症)が、残りの90%はわかっていない。しかし、有望な学説は数多くある。現在可能性が高いと考えられる理論は、胎生期に神経系の発達異常があったとするものである。神経系の発達異常は、小脳・辺縁系・大脳皮質にみられると考えられているが、なぜ発達異常が起こるのかについてはわかっておらず、遺伝的要因・胎生期や出産時の傷害・神経伝達物質などさまざまな原因が予想されている。遺伝的要因については明確になっている部分があり、社会性の障害を示すいろいろな障害の一つとして自閉症が考えられている。

自閉症の原因となる異常がまだみつかっていないということは、重要な問題である。追試をしても同じ研究結果が出るということはほとんどないのが現状である。決定的な結論が出ないということは、自閉症という症状を示す原因がいろいろあり、この中に広汎な障害を含んでいるのかもしれない。

自閉症の原因はまだ解明されていないが、いくつか明らかになった点もある。自閉症は、生物学的な原因によって起こるものであり、同一の家族内に、2人目の自閉症児が生まれる可能性はほとんどない。両親の扱いが悪かったから、自閉症になったのではないことは断言できる。

第4章 言語と認知

自閉症者の最も顕著な特徴は、言語と認知の面に現れている。ことばのある自閉症者の言語障害は多種多様で、問題も大きい。この言語障害には、代名詞の反転やエコラリアなどがある。代名詞の反転は、精神分析では自我の危機の現れと考えられ、エコラリアは、行動療法では抑制すべきものとして否定的に捉えられてきたが、現在でも、社会的交流の場で意味論的・語用論的なアプローチが重視されているため、このような誤解を拭えないでいる。言語の問題は、自閉症についてまわる問題であるため、十分検討しなければならない。

自閉症者の情報理解には、優れた面と劣った面の両方がある。例えば、ある特定の事柄については優れた記憶力を示し、道筋、天気、あちこちのレストランのメニューなどは非常によく覚えていたりする。このように突出した能力があるので、自閉症児は正常以上の認知能力があると思われがちである。

しかし、このように部分的に優れた能力がある一方で、別の面では認知に大きな障害があったり、たとえ機械的な記憶は優れていても、意味を記憶する能力に問題を抱えていたりする。このような弱

点があるために、自閉症者は協調性がなく、わがままであると誤解される恐れがある。例えば、子どもが好きな遊びに夢中になっているとき、名前を呼ばれても振り向かないのは、彼が知らんぷりしているからではなく、一つのことから他のことへ注意を転換できないためである。しかし、周りの人からは、自分勝手に人の言うことをきかないと思われてしまう。自閉症にどんな認知障害があり、どんな能力が保たれているかについては、かなりの研究成果が上っている。この章では、言語と認知に関する能力と障害について述べる。

1 言語能力

自閉症児は、言語発達が遅れる。かつての研究では、自閉症児の50%に意味のある会話能力が育たないとされていた(Rutter, 1978c)。現在では、35~40%と言われているが、話しことばが獲得されても、風変わりな特殊な言語になりがちである。学齢前の自閉症児とダウン症児を比較したTager-Flusberg(1993)によると、自閉症児は獲得した言語を有効に使いこなせないという。単語を言うことや語を並べて文に構成するという点ではダウン症児と比べて遜色ないが、意味論的側面*(例：語彙の発達、語の意味)や語用論的側面**(例：社会的に言語を使う)に障害が認められた。

言語の意味論的側面

自閉症児が会話で使う単語は限られており、学習した語彙をすべて使うことがない。両親は、何百もの単語を言えるのに、なぜ会話

では使わないのだろうか、と不審に思う。

この他に、代名詞の反転やエコラリアなど、特異な言語症状が認められる。代名詞の反転とは、“私”の代わりに“あなた”と言ったり、他の人を指すのに“私”と言ったりすることである。青年期になると、“私”、“あなた”など、代名詞で呼ぶのではなく名前で言う傾向があることを、Lee, Hobson, Chiat(1994)が報告している。代名詞の反転は、長ずるに従って目立たなくなっていくが、一生続くものである。

聞いた単語、あるいはかつて耳にしたことばを言うエコラリア(反響言語)は、話しことばを獲得した自閉症児の85%に認められる(Schuler, Prizant, 1985)。かつて行動主義者たちは、エコラリアを好ましくない自己刺激行動と捉えていたが、現在では、コミュニケーション手段であり、言語発達を促す大切な要素だと考えられている。「即時的エコラリア」は、耳にした語や句をその場で繰り返すためわかりやすいが、「遅延エコラリア」は、数時間ないし数ヶ月後に出現するため、エコラリアかどうかということがわかりにくい。テ

訳註

*意味論

言語学において、統語や形態的特徴によって伝達される意味を研究する分野(クリスタル, D. 著、杉下・宇野・紺野訳、『臨床言語学』、西村書店、1993)。

*語用論

言語学において、言語を社会的交流で用いる際の選択や制限、コミュニケーション行動において、相手に与える言語の効果などを研究する分野。

レビや映画で聞いたことばを繰り返すのも、「遅延エコラリア」の一種である。大人が忘れてしまったようなことばでも、自閉症児は確実に覚えているし、ある会話場面で耳にした、ちょっとしたことばも繰り返して言えるほどの記憶力をもっているが、場面や状況にそぐわないのである。

言語理解については、固いとか字義通りだとか言われる。つまり、意味的な流れの中で言語を理解することが困難なのである。この意味論的な理解の障害は、高機能自閉症者にとって大きな問題となっている。なぜなら、高機能自閉症者は、いろいろなことができるので何でも理解できると思われてしまいがちだが、実際はそうではないからである。見当はずれな反応をするため、言うことをきかないとかサボっていると思われてしまうが、本当は言われていることが理解できないのである。

語用論的側面

社会的言語や語用論的障害は、いつも指摘される問題である(Tager-Flusberg, 1989)。ことばのある自閉症者の会話は、かなり偏奇している。的外れな話題について事細かに、しかも何回も繰り返して話したり、突然話題が変わったり、他の人の話題を無視したり、会話がちぐはぐになっても取り繕うことができないなどである。

やたらと細かいことばかりにこだわるというのは、自閉症者の会話でよく見られる特徴である。例えば、日付・年齢・住所・電話番号をしつこく聞いたり、旅行の話をしているときに山の高さは何フ

ィートか、メートルで言うのとどのくらいかなどと質問したり、久しぶりに故郷に帰った話をしていれば、どこで生まれて誕生日は何月何日だというようなことにこだわってしまい、会話の流れを止めてしまうのである。

一つ的话题を何度も繰り返すということもよく見られる。自閉症者の興味は偏っているため、会話の相手を辟易させてしまう。バスや飛行機や電車の時刻表の話しかしないこともある。話題は奇妙だが、自閉症者の単一思考がよく表れている。

ある人が提供した話題を独占してしまうこともよくある。そして、他の人たちが話したいことや興味をもっていることがわからずに、勝手に話題を変えてしまったりする。会話が成り立たなくなったとき、健常人ならなんとか取り繕おうとするものだが、自閉症者はそういうことができない。自分の特殊な興味だけしかわからず、周りがみえないということが、自閉症者の大きな特徴である。

Tager-Flusberg(1993)は、自閉症者は、社会的会話の暗黙のルールがわからないのだと言う。自閉症者は、他人が自分とは違うということが理解できないのである。社会的な会話のルールを理解したり、他人の興味を理解したりできないところに、語用論的問題がある。

2 情動の表出と理解

Hobson(1992)は、自閉症者は人の感情を受け取ったり理解したりすることが困難で、これが言語障害以上に大きな障害だと述べ、このことを明らかにするためにいくつかの実験を行なった。自閉症児

に何枚かの顔写真を見せると顔の印象ではなく、被っている帽子によって分類したが、同じ写真を同じIQの精神遅滞児に見せると顔で分類したという。また、感情的な声を聞かせて、それに対応した顔の写真を選ばせたところ、やはり障害がみられたという。これらの結果は、自閉症児に視覚の問題があるから起こるのではない。なぜなら、自閉症児は、話しことばを学習する前に数字や文字を覚えてしまうのだから。

一方、自閉症児が奇妙な感情表現をすることもよく知られている。不安なときにゲラゲラ笑ったり、はっきりした理由もないのに泣いたりすることがある。知的障害児や健常児に比べ、自閉症児は、否定的な感情表現をしたり、状況にそぐわない表現をしたりしやすい。目が合ったときにほほ笑んだり、他の人が笑いかけたときに笑顔で返すということは、自閉症児ではあまりみられない。

ダウン症と比較して、自閉症児は指示に従って表情を作ることができないと、Loveland, Tunali-Kotoski, Pearson, Brelsford, Ortegon, Chen (1994)らが報告している。表情をみてまねることはできるが、モデルがないとその表情を作れないという。

自閉症者の感情の理解や表出については、まだ十分にわかっていない。複雑に交錯する人間の感情というものを、自分自身も含めて理解することは、自閉症者にとって難しいことなのであろう。微妙な感情を表現できない自閉症者は、不安が強いように見える。表面に現れた感情が、その底にある感情を必ずしも反映していないこともある。

3 記憶

自閉症児の記憶には、いろいろ興味深い問題がある。よく注目されるのは、機械的記憶の側面である。普通の人にはあまり意味がないと思われるようなバスの運行表とか皇族の家系などを、詳細に記憶していることがある。また、視覚的記憶にも優れていて家庭内の物品の配置がわずかでも変わっていると、すぐに気づく。反面ある側面には障害があり、BoucherとLewis(1989)は、自閉症者が同じことを何回も質問するのは、前にも質問して答えを聞いたということ覚えていないからだろう、と推測している。また、指示されたことに従えないのは、行動に移す前に忘れてしまうからではないとも言われている。自閉症者が機械的記憶に優れていることは誰しも認めるところだが、記憶の別の側面に障害があるということに関しては、対象とした自閉症者の、診断基準・方法論・結果の解釈などによって異なった結論が出ている。

2年ほど前、記憶研究の分野で自閉症と健忘との関係が話題になったことがある。健忘の患者は、正常な知能をもっているが、側頭葉中部や間脳の損傷により記憶の障害を呈している。自閉症者が正常な学習能力をもっていることを除けば、自閉症と健忘の記憶障害が似ているという研究者もいる。自閉症と健忘の比較は、側頭葉を破壊したサルが、自閉症に似た症状を示すという研究報告から始まった(海馬と乳頭体の損傷)(Bachevalier, 1994; Boucher, Warrington,